

飲料水の備蓄に関するアンケート調査結果について

このアンケート調査は、住民の皆さんが災害時に飲料水などの備えをどの程度意識し、取り組まれているかなどを把握し、甘楽の天然水を商品化するための検討資料とさせていただくため、行政区長や区長代理、組長様(430世帯)を対象に実施させていただいたものです。

お忙しいところ400世帯(回収率93%)の方にご協力いただきました。誠にありがとうございました。

つきましては、アンケート調査の結果を踏まえた分析内容等についてご報告いたします。

■アンケート調査分析結果

問1、問2は地区や世帯構成について伺いましたが省略させていただきます。

問3では、大規模な自然災害が発生する確率が高まっていると感じているかを伺ったところ、90%以上の方が「とても感じる」「ある程度感じる」と回答されています。

→当町においても令和元年10月発生した台風19号(東日本台風)で大きな被害を受けており、自然災害の発生をより身近に感じていることが伺えます。

問4では、飲料水を備蓄しているか伺ったところ、「備蓄している」が39%でした。大規模な自然災害については、危機感を持っているものの、およそ6割の方が飲料水を備蓄されていないことがわかります。

→このことから、災害の発生時は、「自助」・「共助」・「公助」の役割の一つとして、まずは自らの命は、自ら守ることを考えていただく必要があることを訴えるとともに、この機会に最低限度の備蓄をしていただくための啓発活動が必要であると感じます。

問5では、飲料水を備蓄されている方に備蓄の方法を伺ったところ、ペットボトルが88%、ウォーターサーバーが8%で、ほとんどの方がペットボトルで飲料水を備蓄されている状況でした。

問6では、飲料水を備蓄されている方に、推奨量(1人につき3Lを3日以上)を備蓄しているか伺いましたが、満たしている方は44%でありました。

→約4割の方が推奨量を備蓄されておりますが、約6割の方が推奨量を満たしておりませんので、少しでも推奨量に近い備蓄を促す啓発活動を進める必要性を感じます。

問7では、推奨量を満たしていない理由を伺ったところ、「大量購入すると賞味期限が切れてもつたいない」が43%で一番多く、続いて「確保するスペースがない」が20%、「現在の量でよいと思っている」が16%、「少しずつ備蓄量を増やしているため」が14%、「避難所での支援でなんとかなると思っている」が4%という結果でした。

→期限切れにならないようにするため、ローリングストック方式の啓発が必要であると感じます。また、その他の意見としては、通販などで定期的に購入している方や飲料水とセットで購入しているという方もいらっしゃいました。

問 8 は、備蓄用の飲料水の購入先を伺ったところ、「スーパーやドラッグストア」が65%で最も多く、次いで「その他」が20%、「インターネット注文」が15%という結果でした。

→「その他」では、定期的に通販や生協などで購入されている方も一定程度いらっしゃいました。大型店舗などで、比較的安価なものを購入している傾向が伺えます。

問9では、ローリングストック方式(非常時に十分な備蓄をしておき、定期的に消費しながら、消費した分を補充する方法)について伺ったところ、「知っている」が約7割、「知らなかった」が約3割でした。

→ローリングストック方式をご存知の方が多いたことが伺えます。

問10では、ローリングストック方式を実践しているか伺ったところ、「している」が45%、「していない」が37%、「これから実践したい」が18%という結果でした。

→このことから、実践の方法などを正しく理解してもらえば、備蓄される方も増える見込みがあることが伺えます。

問 11 では、備蓄していない方にその理由を伺いました。「先延ばしになっている」方が51%、次いで「必要性を感じない」が17%、「保管スペースがない」と「避難所での支援で何とかする」と思っている方がそれぞれ9%でした。

→備蓄の必要性を感じているものの先延ばしになっている方が半数近くいらっしゃるため、備蓄するきっかけを提供することが必要であることと、避難所に避難する前の最低限度の備蓄の必要性と自助の意識啓発が必要と感じます。

問 12 では、商品化を機に購入又は備蓄を検討したいか伺ったところ、「検討したい」が47%、「検討したくない」が9%、「どちらとも言えない」が44%という結果でした。

→商品化を機に購入又は備蓄を検討したいという方が約半数いらっしゃいますので、周知や啓発方法を検討いたします。

問 13 では、いくらなら購入を考えるか伺いました。「1,000 円以下」が41%、「1,500 円以下」が35%、「2,000 円以下」が20%、「2,500 円以下」が4%という結果でありました。

→当然、購入者は安いほど良いという結果につながっています。市場価格との比較やプロジェクトに位置付けている様々な取り組みを展開すること、さらには継続性を考慮しながら、企業版ふるさと納税による企業様からの寄附額に応じて、販売価格の設定を考えていきたいと思えます。

問 14 では、売上金をどのような取組に活用するのがよいか伺いました。「備蓄品の充実」が32%で一番多く、次いで「水源・森林保全」が18%、「観光PR」が11%、「分別・リサイクル」と「食品ロスやフードバンクへの寄付」がそれぞれ10%、「教育」と「地域活性化」がそれぞれ9%、「その他」が1%という結果でありました。

→販売収益は、このような結果を踏まえて、各取り組みを推進するために活用できればと考えております。

問 15 では、飲料水と食料をセットにし定期的に配達される仕組みがあつたら注文したいか伺ったところ、「セット内容を見て検討したい」が67%、「注文したくない」が18%、「注文したい」が15%という回答でした。

→このことから、飲料水とセットで食料などについても定期的に配達される仕組みをいかに提供できるかが、備蓄を促すきっかけになることがわかります。

飲料水と食料などのセットを定期的に配達される仕組みについては、今後、関係企業との協議に時間を要することから、今年度は、まず飲料水を備蓄していただき、来年度においては、関係企業・団体と協議し、飲料水と食料などのセットでのご提案を検討させていただきます。

■自由意見に対するQ&A(一部抜粋)

自由意見では、賛否両論ございます。貴重なご意見として真摯に受け止め、可能なご意見はプロジェクトに反映したいと考えております。まずはプロジェクトの趣旨や災害時に備えることの重要性などをご理解いただく取り組みを進めます。

自由意見の中からいくつかの疑問やご意見にお答えいたします。

Q:品質等は問題ないですか？

A:商品化に使用する水は、稲含山の麓を流れる清流水です。周辺には人家がなく、ほぼ天然に近いこの水は、秋畑地区の那須浄水場へ運んで水道水にもしています。今回はその運んでいる水を採水して、みなかみ町の工場へ運び、熱殺菌等の各種処理や品質検査などを行って、ペットボトルに詰めます。

毎月定期的に水質検査を行っていますが、今回の製造時にも放射能及び水質検査などを行いますので、ご安心ください。

Q:量産可能な水量はありますか？

A:那須浄水場に送られる水量は約80t/日で、そのうち水道水に使用しているのは約40t/日ですので、約半分は沢や川に戻しています。

ペットボトル(500ml 40,000本)に詰めるのに必要な水量は約11t×3回/日ですので、問題はないものと考えております。ただし、渇水時期には採水は行いません。十分な水量があることを条件に毎年1回程度の製造を考えておりますので、水源が枯渇するようなことはありません。

Q:2Lのペットボトルの方が安価で備蓄には良いのではないか？

A:2Lのペットボトルの方が割安で販売されており、備蓄に向いていることは確かです。しかしながら、令和元年10月に発生した台風19号では、避難所に用意された飲料水は2Lで、平等に配布するには、コップが必要であったため、すぐに避難された方にご提供できなかった経緯があります。

そこで、500ml程度に小分けにすることで、個別に配分でき衛生面においてもよい面もあることから500mlの商品化を目指したものです。各家庭においても自宅で避難されている時は良いと思いますが、知人宅や避難所等への避難の際には、500ml程度のものが持ち運びに便利ではないかと考えております。

Q:アルミ製のボトルの方が長期保存に向いているのでは？

A:プラスチック製のペットボトルより、アルミ製のボトルの方が長期保存には向いていると思われます。ご存知のとおり、アルミ製は少し製造コストが割高になってしまうことと、中身が見えないので品質や保管状況がわかりにくい点もありますので、今のところ流通の多いプラスチック製のペットボトルで製造する予定です。

プラスチックがゴミとなる問題がありますが、まずは分別・リサイクルを推奨し、リサイクルボトルを使用したり、環境により素材のものを使用できるように製造元と協議しながら進めてまいります。

Q:長期保存できる商品が良いのでは？

A:最初に製造されたペットボトル水の賞味期限は2年間です。その後、数年にわたりサンプル用ペットボトルの水の品質が維持されていることが実証できれば、賞味期限が延びる可能性はあります。

賞味期限ぎりぎりまで保存されるのではなく、賞味期限が到来するまえに定期的に入れ替える仕組みを推奨しております。

Q:町の備蓄はどうなっているのか？

A:町では、現在、飲料水については、2Lと500mlのペットボトル水を甘楽中にある備蓄倉庫などに保管しています。災害時には、各メーカーなどと災害協定を結んでいますので、追加で飲料水を確保できる見込みです。

今回、製造される40,000本のペットボトルのうち、災害備蓄用として約10,000本程度を備蓄する予定です。

町も災害用備蓄品を市販で購入していますが、今回の製造においては、企業版ふるさと納税を活用して、企業様からの寄附によって購入費用の削減を図る予定です。

Q:町でもローリングストック方式を行っているのか？

A:町では、賞味期限がせまっている水については、定期的に入れ替えたり、町防災訓練時に参加者へ無料配布したりしています。

今後は、関係課との協議が必要ですが、賞味期限が近くなってきたものについては、防災訓練時での無料配布やフードバンクへ寄付しながら、定期的な入れ替えを行う予定です。

Q:採算がとれるのか。税金の無駄にならないか？

A:商品化するには業務委託料で約330万円、その他、初期投資として採水場所の工事、備品購入、デザイン委託料、保管手数料などの費用がかかる見込みです。

このため、初期投資にコストがかかってしまい採算面を考えると利益を出すのは難しい状況です。このため、水道事業会計予算から一般会計予算に組み替えることによって、企業版ふるさと納税制度が活用できるため、企業様からの寄附を募集しているところです。現在、予想以上のご賛同とご寄附をいただいております。関係団体・機関、住民の皆さんに少しでも安価に提供できるよう企業の皆様のご協力をお願いしたいと考えております。

まずは行政の責務として飲料水等の備蓄の充実を目的に製造いたしますが、行政ができることには限界がありますので、この機会にまずは自らの命、家族を守る手段として各ご家庭でも備蓄をお

願いたします。

販売収入は、各種災害備蓄品の充実、子ども達への教育推進などプロジェクトに位置付けている取り組みにも活用する予定となっていますので、社会貢献の一環としてお考えいただければ幸いです。

Q:飲料水以外に必要なものがあるのでは？

A:災害時にまず困るのは飲料水、食料、トイレなどです。その他にも平常時から備えていただきたいものはたくさんありますが、一度に災害備蓄品を揃えることは負担が大きいため、徐々に備蓄品を増やしていただきたいと思います。その一つとしてまずは飲料水を備蓄していただきたいと思います。

大きな地震などで水道管が破裂してしまったりすると、断水となるばかりでなく、トイレも使えなくなる可能性があります。停電になることも想定できます。非常時を想定されると必要なものがわかるかと思いますが、町のホームページに「防災マップ」のパンフレットが掲載されています。今お住いの地域の危険箇所や備えておくべき備蓄品のリストなどがのっていますので、ぜひご覧ください。